分枝 branching 02

http://branching.jp
system@branching.jp

分枝 -branching-

ブランチングは寄稿併置ペーパーとして発刊配布配置され、共同体に点在する多様なる意識の同時性を「間主観」的に表出する（手にとる）ことを目的として発想されました。
寄稿者は各々異なった属性（世代・所属）とスタンスに於いて自在に見解と表明あるいは想像力を、テキスト（スクリプト）によって遺し次世代へ継続すべきアナログメディアのカタチを提供します。
様々な方に、内容やテーマを問わず、現在の人間の姿の吐露あるいは個々の多様であることをそのままにして纏めず、併し同時代性あるいは地域性という場所の意味を世代を越えて構築しながら崩し修復しまた変異を促す契機ともなり得るローカルなエスプリ表象として試みます。

ブランチング 03 発刊 2012 年 12 月 9 日
ブランチング 04 発刊 2012 年 3 月 9 日
ブランチング 05 発刊 2013 年 6 月 9 日

入稿先　system@baeikakkei.com

言葉のゆくえ

Tatsuya NISHI 1974~
西 達也

「言葉は、発した途端に受け手のものになる。」
ある本を読んで痛感したことなんだけど。

例えば、A さんと B さんがいるでしょ。

A さんは「好きです」、と B さんに伝えたとする。
その瞬間に、その言葉は B さんのものになる。
なるほど、確かに。

こういう場合どうしても A さんが主役になりがちだけど、
B さん目線で見た場合、A さんに「好きです」と言われた。
「好き」のボールは B さんに投げられたことになる。

そして B さんは考えるよ。
「好きです」って言われたーって。
どうしよって。
まぁ、B さんも嫌な気がしない場合は、
「やったー！」なんて感じかもしれないけど、
A さんに対してそんな気がそもそもない場合は、
「えっ！？」なんていう驚きや戸惑いを感じるかもしれない。

そう、
だから、その言葉を B さんが期待していた時とそうでもない時で展開はガラっと変わるよね。
早い話が A さんの片思い的な場合と両想い的な場合で、
この物語の展開は変わってくる。

だから、A さんの投げた「好き」の言葉って、
受け手が欲しいと思ってる時、思ってる人、に投げれば効果は抜群。
投げたボールをしっかりと胸の真ん中で、グローブの真ん中で、
いい音出しながら、ときには笑顔で「よっしゃー」とか言ってキャッチしてくれる。

「言葉は、発した途端に受け手のものになる。」
でも受け手に興味や関心がない場合は、その言葉は一体どこに行っちゃうんだろうね。

A さんに戻ってくるのか、B さんの中に残るのか。。
はたまた、とんでもない G さんなんかのところにいきなり行っちまうのか。
話があらぬ方向にいって、G さん登場なんて事もないことないか。。。

それはそうと、これを書いていても同じことが言えるなぁ。

あ、西達也の書いたエッセイだ！どれどれ読んでみよう！
なんて人がどれほどいるか。
たぶん、おそらく、僕がもっと活躍人で、著名人で、全国区とまではいかなくても、
そこそこ名が知れてる人だったら、それだけで読むような人もいるんだろう。

そう、だから A さんは自分をもっと知ってもらうような努力をすることも大事。
そして、A さんが B さんに「好き」をしっかりと伝えるには、
お互いの関係性やタイミングも大きく関わってくる。

「伝えたい事を伝えたい人にしっかりと伝える」
「発した途端に受け手のものになる言葉」
これ、言葉だけじゃなくて何にでも当てはまるような気がするなぁ。
広告やアートや、なんなら子どもの勉強にも、夜 7 時の NHK ニュースにもね。

僕はこの冬独立します。
あ、これ本当です。
予定より少しだけ早いですが。

---

notice

TOPOS
http://toposnet.com

高地回遊　Migrate Highland

02,September - 17,September 2012
ベッカライ麦星　吉村正美 Masami YOSHIMURA
ギャラリーアンデルセン　町田哲也 Tetsuya MACHIDA
エルム　前田聡子 Satoko MAEDA
アリコ・ルージュ　梅田明雄 Akio UMEDA

18,September - 30,September 2012
ベッカライ麦星　前田聡子 Satoko MAEDA
ギャラリーアンデルセン　吉村正美 Masami YOSHIMURA
エルム　梅田明雄 Akio UMEDA
アリコ・ルージュ　町田哲也 Tetsuya MACHIDA

川合朋郎　TOPOS TERRASOW　28,October 2012 - 03,February 2013
トポステラソ　川合朋郎展
at まちとしょテラソ
OPEN 09:00 - 20:00
CLOSE 火曜日（火曜日が祝祭日の場合は、開館し振替日はもうけない）　蔵書整理日
〒381-0297 長野県上高井郡小布施町小布施 1491-2 tel 026-247-2747 fax 026-247-4504

梅田明雄　VIVA TERRASOW　リトグラフ講座 ― 15,September 2012 - 13:00 ~ 16:00
水と油の反発を利用して刷るリトグラフ。版画の技法の中では、ちょっと難しい技法ですが、
今回はアルミ板を使って、シンプルな方法で、その原理を学びながらリトグラフを楽しんじゃいましょう。

さっこてん　ART TERRASOW　前田聡子写真展　03,October - 15,October 2012
Talk & Slide Event　13,October 2012 - 18:00~20:00
さっこてん　前田聡子写真展
at まちとしょテラソ
OPEN 09:00 - 20:00
CLOSE 火曜日（火曜日が祝祭日の場合は、開館し振替日はもうけない）　蔵書整理日
〒381-0297 長野県上高井郡小布施町小布施 1491-2 tel 026-247-2747 fax 026-247-4504

拒絶するデザイン

Yoshio UJIIE 1959~
氏家啓雄

　昨年、突然我が身に起こった病の闘病記を書きしたためていたのだが、最近、この病と大いに関わりがあり、またアートディレクターとしての血が騒ぐ話題を見つけてしまった。その話題とはタバコのパッケージデザイン。話題に入る前に、まずは自分が体験した病のことから記したいと思う。

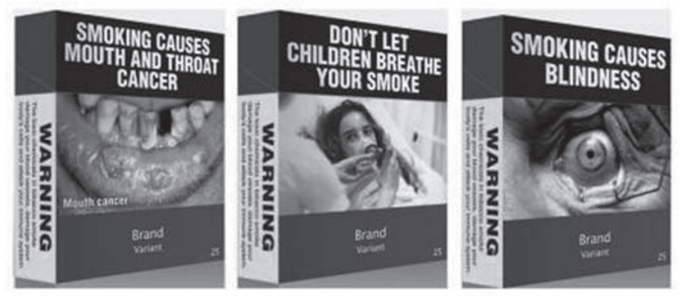
　昨年の夏、私は突然脳梗塞を患った。まだ 52 才だというのにだ。何事も無く元気に仕事をこなしていた私に、病は突然降り掛かってきた。
　クライアントから依頼されたロゴマークデザインに熱中していた夜半、仕上げに迷いに迷った上、どうにも疲れが取れずに布団にもぐりこんだ。朝方の四時頃のことだ。一眠りした八時頃、尿意で目が醒める。左足から起き上がろうとするが、膝が上がらないまま前方へ転がった。そしてもう一度。転倒の異変に気づいた家人が起きてきた。気持ちを落ち着かせてトイレへ這いずる。左膝に力が入らないのが自分でも解る。「たぶん脳にきたな。救急車呼ぼうか、タクシーか、まあ歩けるからタクシー呼んで。」と悠長なことを言いつつ、タクシーの待ち時間にタバコ何本か吸って、動転した気持ちを落ち着かせるつもりだったのだ。「これが人生最後のタバコかな」と軽口を叩きつつ、マルボロの BLACK&GOLD という当時愛飲していた奴を 2 本、深々と吸い込んだ。
　マンションのエントランスまでの 100m が、不自由な歩行でやたら長く遠く感じた。タクシーで近所の救急の総合病院へ向かい、外来に並ぶこと 30 分。その時点ではまだ左膝から下のみの異常だった。
　そして緊急入院からベッドでの点滴治療が始まる。医者は「このまま良くなることもありますが、逆に悪くなることもあります」と言う。しかし、私には事態がさっぱり解らず、むしろ悪くなるというイメージなどなかった。点滴投与で、一晩明けたら絶対良くなっている、足は元通りになると。
　その夜、またしても尿意で目が醒める。点滴チューブを付けたまま、右のベッドサイドに起きあがろうとして左手をつくも、「あれ、左手が無いぞ？」。呆気に取られるも、次の瞬間ベッド下に頭から崩れ落ちる。異変に気づいて飛んできた看護婦に抱え上げられ、ストレッチャーへ。深夜の CT 撮影で頭部の異常が無いかを検査する。とりあえず何事も無く、安定剤かなにかを飲まされ眠りにつく。
　翌朝「ほら、悪くなることもあると言ったでしょ」と担当医。なぜか満足気だ。こういうことだったのか。遂に来たのだ、その時が。左半身麻痺。足のみならず手までがだらんとして動かない。真っ先に思ったのが「この状態じゃ、吸え無いじゃないか。確かジーンズのポケットに…」。タバコのことだった。
そのジーンズも愛用のジッポーも持ち去られ、家人に「もう全部捨てました」と言われた私は言葉もでなかった。

　遂に観念した。禁煙の決断に 3 分もかからなかった。100% タバコのせいではないが、それほど己の身体に降りかかったダメージが大きかった。「ヤニでまみれた俺の仕事場の壁紙、全部張り替えてくれ」。タバコの痕跡から遠ざかることが、禁煙と更生の一歩だった。

　序文が長くなってしまった。冒頭の話題であるタバコのパッケージデザインについて話を戻したい。

　オーストラリアに続き、EU 域内でもタバコ販売に際して、それぞれの銘柄別デザインを全廃し、一律同じパッケージングを義務づけることを検討中であるという。さらにこれを吸うと身体に悪いよ、という脅しのメッセージがこれでもかと添えられる。

CIGARETTES
Brand
Protect children: don't make them breathe your smoke
CIGARETTES
Brand
Smoke contains benzene, nitrosamines, formaldehyde and hydrogen cyanide



目を覆いたくなるようなパッケージ…。これらは購入を躊躇させるに充分なデザインだ。買われることを拒絶するパッケージ。だが、発病前のタバコ中毒であった私なら何の躊躇も無く買えたに違いない。なにしろマルボロを普段 70 本、多いときで１００本吸っていたから。こんな子供だまし程度で怯むわけが無い。カートン積み上げて自慢するのがオチだろうな。「このホラーパッケージを覆い隠す、スマホのケースみたいなタバコケースなんて売れそうだなあ。マルボロタイプ、JT タイプ。MARPOLO なんてロゴだろうよ」、なーんて嘯いていただろうな。結局のところニコチン摂取が目的の重度のチェーンスモーカーにとっては、デザインなどどうでもよいのだ。しかしながら、今となってはこれらの警告の実体験者の私にとって、このビジュアルはより真実味を、いや現実を突きつけているよう訴えてくる。

さらに、最新の情報によるとイギリス政府はタバコにプレインパッケージングの導入を計画しているという。プレインパッケージングとは個別の銘柄などの情報も全て取り除かれた、ただの箱。計画では暗い黄緑色になるらしい。これはデザインとしては怖い。特に情報が無いのだから。情報伝達を拒絶するデザインだ。これなら発病前の私を躊躇させるかも知れない。タバコかどうかすら判らないのだから。

　デザインは商品の物語を伝える。それはほとんど全ての場合に於いて楽観的であり、たまには大げさで詐欺的ですらある。たとえ物語が悲観的どころか悲劇的なものであったとしても、タイトル（ブランドや商品名）さえ明示されていれば、消費者は物語を読む（味わう）ことが出来るというものだ。イギリス政府が検討中のプレインパッケージングは、それすら拒絶した究極のユニバーサルデザインと言える。

　巨額たばこ訴訟が世界中で始まっているらしい。アメリカでは 1998 年にたばこ大手 4 社が全米各州に対して 25 兆円を支払うことで和解した例もある。このデザイン、訴訟の際の対策として、企業努力を表現するのが狙いなのか。ここまで努力したんだから、買う奴が悪いというメッセージだろう。つまりは企業責任の追求を拒絶するためのデザイン戦略だ。
　しかしだ、そこまでするなら売らなきゃいいだろうと。あっけなくタバコを止め、特に禁断症状も無い私は人ごとのように思うのだ。実際、タバコ販売を止めてしまうという選択肢は無いのだろうか。国からみると一兆円近い税収源。漸次的に減らしていくということは出来ても、この簡便な徴税対象に代わるものはなかなか無い。
国は売らざる得ない財政事情もあるのだ。

と、タバコ税の高額納税者としての役割をひとまず終えた私。フゥ～。

そして、昨年夏の発病からほぼ一年過ぎた。入院は半年に及んだが、退院後も真面目にリハビリに励んでいる。家族、友人の支えもあり、杖を突きつつの歩行や車の運転も出来るようになった。元の仕事にも復帰出来た。ニコチンは完全に体内から抜けている。しかし、麻痺との闘いはまだまだ続くだろう。

最後にひとつだけ。
ニコチンの中毒性云々でタバコを止めるのが大変というのが既に陰謀だ。
止めるのは簡単だから、怖がらずに止めてみよう。

FILTER CIGARETTES
Marlboro
MEDIUM
喫煙は、あなたにとって脳卒中の危険性を高めます。

女性性について、あるいは中年についての考察

Ko MATSUSHITA
松下 幸

私の人生の話をしようと思う。
2012 年 7 月 13 日で満 40 才を迎え、皮膚の弾力を失い、かわりに顎の下の醜いたるみと腰回りのドーナツのような脂肪を得た、女としての私の話をしようと思う。
ここで「女として」と強調するのは、私がこの 40 年間生きてきて、一度も自分が女であることを真剣に考えたこともなければ、そこを強調して生きたこともないからだ。
私は今、二人目の夫と 3 才になる娘とともに暮らしている。二人目の夫ということは、結婚ももちろん二度目である。
結婚と結婚の間や結婚以前に（少しだけ結婚中にも）男性とお付き合いしたことはあるが、自分を性的存在として認識していたかというと、それは違う。出産の時ですら違う。
ただ漫然と、与えられたものを得て、時に意に沿わぬ方向にも流れ、楽しかったら掴み楽しくなくなったら手放してきただけだ。私の女性としての人生は、まるで子供のまま過ぎてきたみたいなものだ。
子供のまま、中年に差し掛かってしまった。アラフォーだ女子だと最近ではその重さを薄められてはいるが、まごうことなき中年だ。これからは、今まで当然のように持っていた「若さゆえの美しさ」を、順繰りに手放していくことになる。私は中年の入り口に、ついに立ってしまった。

5 月の半ばだったか、突然夫の海外赴任が決まった。移住にもつながりかねない、長期の滞在になる。出国は 8 月 6 日だ。
確かに海外移住は皆の憧れである。誰もができるものじゃない。そしてそんな皆の憧れを手に入れた自分はちょっと自慢気である。でも蓋を開ければ、不安で一杯だった。英語も大して話せず、何より日本をこよなく愛していて、日本語が使いこなせることを誇りにして生きてきた私にとっては、大変な自我の危機なのだった。
その不安を覆い隠すように、私は周りに海外移住を吹聴してまわった。皆の「寂しい」「かっこいい」「羨ましい」「行く前に会いましょう」、そんな嵐のような反応に酔い、自分はすごい特権を得たのだと一層自慢したい気持ちを募らせ、一方で、触れ回ることで自分が後に引けなくなり、なおさら不安に押しつぶされそうになった。
5 月に移住が決まった時から 8 月 6 日の出国まで、その相対する状態は加速度的に拮抗を強め、そのうちに、自分が生まれ育った、世界で一番愛している国を離れて異国で暮らす選択がどういうものだったのか、最高の緊張と不安とともにつきつけられるのだと思っていた。
こういう事態は、若い時にはまま起こる。それが少しずつなくなるのは、生きやすくなる事であると同時に、感じなくなるという事でもある。
生きることに慣れてしまうと時間の流れは速くなる。ひと月が短くなり、ひとつの季節が短くなり、一年が短くなっていく。指の間から知らないうちに時間という砂粒が落ちていくみたいに、地すべり的に年をとっていく。
実はこれは、とても楽しいことだ。不思議な事に、40 に近づくにつれて友人が増え、人付き合いが楽しくなり、仕事にもやりがいを感じ、毎日が華やかになっていった。
若い頃の自分であれば、この規模の社会生活はきっと負担以上の何物でもなかった。けれどそれを全て受け取って楽しむ度量ができる。それが 40 才の鈍感が成せる技であり、若さを失う代わり得た人生の楽しみ方だった。
けれど、なんというか、爆発的な成長がもう自分には起こらない。それが寂しくもあった。爆発的な変化もなければ、葛藤もない。これから老いていくにしたがって葛藤は増えていくだろうが、きっと若い頃のように、熱い鉄板の上に落とした水玉みたいに勢いよく反応することはもうないだろう。
海外移住は自分にとって、最後で最大の「爆発的な変化」であるように思えた。だから、上っ面をごまかしきれなくなった自分に相対するのを、旧友に再会するように楽しみに待っていた。
そして、出国の日が来た。
旧友に再会するように楽しげに日本の生活は終わり、特に何の拮抗もないまま出国してシンガポールに到着してしまった。
それほどに、私は鈍感になってしまったのだった。

若い体の私も、もう終わったものだと思っていた。
20 代のスナップを久々に見た時は、失った若さを懐かしんでいられる余裕がまだあった。でもたった 3 年前、しかも産後一番太っていた時の自分より、さらに体型が崩れ、顔が別人のように老けこんできたことを知った時に、私は初めて、人生で初めて、心の底から容姿について焦った。
容姿について卑下したり絶望したりすることはままあった。けれど、焦ったことはなかった。
実は容姿の問題というのは、対男性というよりは対女性のほうに向けた話で、そこには女性同士の苛烈な戦いと同胞意識がないまぜになった、ある意味厳しい「階級社会」みたいなものがある。どこの階級に自分が身を置けるか。それは自分の体や肌や髪の老化度によって決まってくる。
今までそういう意味で、他人と勝負したことがなかった。自分がどの階級にいるかなんて、お構いなしだった。それでも女性たちはある程度私を認めてくれたし、努力してある程度の階級にいるくらいなら、努力せずに下の階級にいるほうが価値があると思っていた。
しかし、その時代が突然、知らないうちに終わったのである。多分、38 才の終わりに急激に痩せたことが契機だった。そのせいで頬はこけ、皮膚はたるみ、体のあちこちに皺ができて、髪がバサバサになってしまった。
一度落ちてしまうと戻らないのが髪と肌の質である。あの減量で私は若さを取り戻すはずが、大量の若さを手放してしまった。
今度はそこで絶望してしまった。どうでもよくなり、どんどん食べてどんどん体重が増え、しかし元々男性関係などないので誰も私のその変化に頓着せず、友達や娘と楽しくやっている生活は何も変わらず、なんだ、別にいいじゃない、若さを失うなんて、大したことじゃなかったんだわ、とまで思い始めていた。

そんな時に、予想外のことが起こった。
シンガポールに発つ準備がいよいよ大詰めを迎え、売却したマンションを出て友人の家に一泊させてもらった時のことだ。
子供と大人 8 人が雑魚寝する、まるでキャンプみたいな楽しい夜で、私と友人とその夫の 3 人は、皆が寝静まった後も未明まで大酒を飲んでいた。もうお開きにしようかという段になって、歯磨きも済ませて雑魚寝の寝室に向かう途中、フランス人である友人の夫と暗い廊下で鉢合わせ、その瞬間抱きしめられ、キスされたのだった。
最初は「フランス人は随分と濃厚な友情表現をするな」と思った。
だが「君は本当にセクシーだ」と彼が言った次の瞬間、舌が口を割って入ってきて、胸に手が伸びてきて「あれ？」と思った。いきなり性的なことを仕掛けられた戸惑いとは明らかに違う、目の前が開かれるような不思議な感覚に陥ったのだった。
その時は、まあまあ、もう寝ましょうよ！と明るくかわして、何度も引き止めて抱きついてくるそのフランス人を、大型犬をいなすみたいにして自宅に行かせたのだが、私のなかのその感覚は消えなかった。
もちろん、友人の旦那様だからこういう事態はちょっと困る。だけど自分のなかに嫌悪感がない。今までであれば、確実に胸の奥から吐き気にも似た感情がわき出してきて、自分が男性の慰み者になった気がして、男性という存在と受け身でしかない自分の性を憎んだものだ。が、今回に限っては全くそういう感情が起こらなかった。
相手の男性は私より 20 才近く年上の外国人だ。年上と外人、そのどちらも苦手なはずなのに、そのハードルさえやすやすと越えて、体の妙なところから、経験したことのない軽やかな活力がみなぎるのを感じた。
これは、一体何なのだろう？

急に、ひとつ実験をしてみたくなった。
私が、女性に対する知的な態度を心から尊敬していた男性がいた。その男性が、ちょうど前述のキス事件と同じ頃に、女性の「隙」についてこんな話をした。
「毛嫌いしてる不細工な女が、露出の多いを着て俺にぴったり体をよせてきて、膝に手を置いて甘えた声を出した。
この俺ですらちょっとムラムラした」
前後の文脈は全く無視してそこだけ切り出したが、つまり私にはそこしか残らなかったということだ。
彼ですら！女性のあからさまに性的な姿を毛嫌いする男性ですら、そんな不細工で心の底から嫌いな女にそうされただけで、ムラムラする。その想像を超えた、男性の単純すぎる性的興奮回路を前にして、私は心底絶望するとともに、ふと思ったのだった。
そういえば、私は若い頃から、意図的にこういうことをしたことがない。知らずにそういう事態になっていたことはきっとあっただろう。だからそこに「事件」は起こり、私としては何故こんな目に、と深く傷ついた。
女性としての魅力は内面であり、美しい顔とスタイルであり、知的さだと思っていた。それがない女は男にとって格が落ちると信じていたが、実際は私の周りには「草食系インテリ」という限定された男性しか集まってこず、気のある男性からは逆に「隙がない」と言われてしまうのだった。
かといって、それをどうすれば改善できるのかも分からなかったし、分からないまま男性と関わりたいと思う気持ちそのものが萎えていた。せいぜい韓流ドラマでお目当ての俳優に熱を上げる程度の性的な興奮しか求めなくなっていた。

男というのは、どうやら想像以上に股間で考える生き物だ。
だが、裏を変えせば、その簡単な技術を使えば、私は性的に能動的になれるということなのか？
果たしてその「隙」に男が寄ってくるというのは本当なのか？

フランス人のおじさんに開花させられた自分への性的興味は、ひとつの行動となって結実した。それは出国の前日、髪を切りにいくことにしていた美容師の男性に、女の隙について語った男性が言っていたことをそのままやってみよう、ということだった。
その男性は、私にとっては「異世界の人」であった。中目黒あたりに生息し、ホームレス系の汚いオシャレという高難易度のファッションを呼吸するように着こなしており、声は小さく言葉は少なく言うことは感覚的で、ハンサムというのではないけどやたら「かっこいいオーラ」が出ている人だった。色気といえばいいのか、見ているだけでムズムズして気恥ずかしく、恥ずかしすぎて年に 1 度ぐらいしか髪を切りにいけない体たらくだった。私の周りで「最もかっこいいオーラが出ている人」であり「最もどう対応していいか分からない人」であった。
そして夫の大学時代の同窓でもある。夫の紹介で彼を知ったのだった。
美容師は女性の客と簡単に肉体関係になれるが、結局は客を失うことになるので手はつけない、とも彼は言っていた。色々な意味で、難しい相手だった。
その彼に、実験をしかけてみようと思い立った。

まずは、触らせる。ここ怪我したの、でもいいし、わりと筋肉あるんだよ、でもいい。敬語を減らして「タメ口」を増やす。そうすれば割と簡単に、相手に触らせるか触る機会が出てくる。
ラッキーだったのは、サロンで彼と私が二人っきりになる時間がけっこうあったことだ。フリーの美容師が集まるサロンなので、お客がいない美容師はその場にいなくなるからだ。そこで恋愛の話ばかりする。
服は濃紺のひざ丈まである長袖のシャツワンピースにジーンズ、という固い装いと見せて、胸のボタンをひとつだけ多く開ける。見えそうでみえない、でも見える。私の考えた「極限の露出」である。そして、笑顔。相手へのお世辞。
（そもそも男性美容師と女性客というのはその存在からエロティックだ。男性は女性の髪を触り、頭を触り、鏡ごしにプロの眼差しで女性を審美する。女性としては装いを剥かれて髪を触りまくられて見つめられて、まるで前戯のようである。だから私は美容院が嫌いで、多くの美容院が嫌いな女性の深層心理には、この性的な局面を忌避する気持ちがあるのだと思う。）
そうやって新しい髪型を作ってもらった後で、「今日はこれでお客さん終わり？」と聞いてみた。今まで一度も言ったことのない台詞で釣ってみたのである。すると「お客はいないから、ドラッグストアでヘアトリートメントを選んであげる」と相手が乗ってきた。
私はあっという間に、10 年目にしてはじめて、彼を外に連れ出すことに成功した。
その後は買い物の途中で「おなかへったー」と一言つぶやくことで夕飯に誘わせ、夕飯の場でお互い飲みながら延々と恋愛の話をして、酔ったふりして触りまくって、そのうち共通の趣味の時計を比べ始めたりして（もうこうなると、相手に触っていることが当たり前となり、体の距離まで近まってくる）、だがそんなことを言っている間に時間が遅くなったので、今回は諦めて帰ることにした。
しかし相手は「サロンを片付けてコーヒー飲んで帰るけど一杯飲む？」と迷うことなく続行し、あとはもう、ご想像の通りである。ご丁寧にドアに鍵までかけてあった。
今回はすんでのところで嫌になって拒んでしまったが、相手はそのまま力技で持って行こうとしていた。
要はできればそれでいいという類の関係なのである。

このように、かくも簡単に、今までそういう雰囲気でなかった男性を一気にセックスの現場まで持ち込むことができた。あまりにも簡単だった。簡単すぎて驚いたぐらいだった。一瞬戸惑ったのは「やれればそれでいい、という、安い使い捨てのような女に見られた」という事実だったが、すぐに「それはそれでいい」と思い直した。
はっきりとわかっているのは、私が求めているのは恋愛ではないということだ。
逆に今回のことで、自分が意に沿わず突然襲われるのではなく、「狩られる」状況に身をおいてその現実を楽しんだのだと分かった。
女性として男性に「狩られる」というのは、体験してみると大変に魅惑のひとときだった。思い起こすだけで、頭がクラクラした。

肉体と肉体がぶつかり合う。そして直接に相手の体に入れたり入れられたりして、一番原始的な形で絡み合う。
そのことをあまり真剣に考えたことがなかったが、今回その直前まで体験してみて、むせ返るような生の濃密な匂いに目眩がするようだった。圧倒された。こんな濃くて重量のあることを、私は無自覚にやり流していたのか。その「若さゆえの鈍感さ」（若いからこその鈍感さというものがあるのだ！）に愕然とし、自分が体験した濃すぎる生の奪い合い、与え合いに度肝を抜かれた。
性に、こんなに生を沸き立たせる力があるなんて。

もっと生の深みにはまりたい。その重みを感じたい。心の底からそう思った。中年の入り口に立ったから、体から油っ気が抜けていくのが如実に分かるから、それに抗いたい気持ちなのか？そう自問したけれど、答えは出ない。ただ、前に進みたかった。
けれどそう思うなら、何故美容師の彼に狩られた時に行けなかったのか。それはひとえに、「あまりにも体型がだらしなかったから」である。本当に久しぶりに男に体を見せるという段になって、自分の醜くすぎる体のことが頭をよぎり、どうしても服のなかに入ってくる手をそのままにしておけなかった。

私に起きた爆発的な変化は、海外移住ではなく、40 歳のこのイケてない女の前に急に開かれた、男女をめぐる新たな冒険へ歩を踏み出すことだった。
私はまだ頭をクラクラさせたまま、空港で一言だけ、次に繋がるかもしれないメールを昨夜の彼に送った。
そして、これからせめて触らせられる体型に戻さなければと思いながら、離陸して旋回する飛行機の窓から東京の夜景を眺め、次にまた東京に住む時には、生とは、性とは何かという事に関して、必ず何か掴んで帰ってくるぞ、この老いた体を使って、と心に誓った。

……しかしシンガポールでこの実験を続けるためには、何から手をつければいいのだろう？

纏いし色は

OZ / Keisuke Yamaguchi 1986~
OZ / 尾頭 / 山口佳祐

纏いし色は　　私を還し

纏いしカタチは　私を創る

私があなたに　なる為に

私の纏いは　無を破る

まつしろ現代美術フェスティバルに思う

Hitoshi KIMURA 1948~
木村 仁

もうすでにご承知の方も多いと思うが、当フェスティバルは 2002 年に開催された日韓ワールドカップを機に、私が企画して行った、信州大学教育学部の公開講座がその起源となっている。初回と 2 回は大学名を使った現代美術ワークショップとして行ったが、2004 年にエコール・ド・まつしろ倶楽部が発足したのを機に、ISHIKAWA 地域文化企画室の石川利江さんのご協力もあって「まつしろ現代美術フェスティバル」と名称を変え、開催場所も松代町に移動し現在に至っている。

松代大本営をテーマとしたのは、ご承知のように戦争末期、多くの朝鮮半島の人々の犠牲の上に成り立った松代大本営という第一級の戦争遺跡を近くに持つ私たちが、なにがしかの発信をしてゆく事が、戦後の世界を生きる我々に課せられた使命のように感じられたからだ。また、せっかく開催された日韓共催ワールドカップを、単なる上面だけの短絡的なものとして終わらせたくなかったと言う気持ちもあった。もっとも当初はそれほど長く行うつもりはさらさらなく、初回でおしまいという軽いのりであったのが、韓国のホン・オボン氏をはじめ周囲の声に押されるようにだらだらと継続し、いつの間にか今年は第 11 回という長寿番付（？）となった。

当初は私が発案した現代美術のワークショップ「羽根プロジェクト」を行う事が中心だった。「羽根プロジェクトのワークショップ」とは、あらかじめ用意しておいた折り鶴の片方の羽根の形に、参加者に平和の願いをかけた絵を施してもらい、それぞれが羽根を持って象山地下壕に入り任意の場所に仮設置し、周辺の地下壕の風景を取り入れながら写真を撮り、後日展示会場に元の作品と共に飾るというものだ。片方の羽根をもちいたのは、日常を離れた非日常の世界を表現する事と、戦争末期、広島に落とされた原爆によって若くして病に倒れ、千羽の折り鶴を折りながらも願いむなしくはかなく消えた、佐々木貞子のレクイエムも兼ねている。また、貞子の千羽鶴パフォーマンスを機に平和のシンボルとなった折り鶴の形を借りつつ、国家権力によってはかなくも消えていった多くの人々の命の叫びを表現したかったという理由にもよる。こうした私の主旨に賛同して参加してくれた作家の中には、同様な主旨で直接的に表現した作品も垣間見られた。

２年前の 2010 年に開催した第 9 回まつしろ現代美術フェスティバルでのこと。史跡松代藩文武学校にて作品展示を行った柳健司の作品は、その直前まで遊んでいたであろう三輪車をガラスの素材で表現し、かたわらに原爆によって一瞬のうちに陽炎となって消えた、幼子の陰影をおぼろげに浮かび上がらせた肖像画を立てかけ並列したもので、室内にわずかに届く自然の明かりを利用した効果もあいまって、深い悲しみと大きな怒りを誘う傑作となり、今なお私の心に強い印象を残している作品であった。なお柳による前年度の作品は大八車が広い槍術所に 1 台置かれたもので、舞鶴山地下壕建設に伴い、周辺の住民に移転を強要した軍部に対する人々の遺恨を表すかのように、畳を数枚重ねた荷台の上には、右手のげんこつが怒りを押し殺すように振り下ろされた形を保ってぽつねんと残されているもので、これも人々に力強く訴えかける力作であった。

現代美術は難解で分からないと多くの人々は口をそろえる。しかしながら社会の理不尽さを鋭く感じ取り、弱者の心をくみ取りつつ、それらを世界にむかって力強く発信して行く姿は現代美術の一つの表現であり、醍醐味でもあるのだ。

身体を動かすことの意味

Yumi KITAJIMA 1961~
北島由美

　最近、保育士の皆さんや大人向けのリトミック講座をいくつか持つ関係で、自分のしていることを文章にしなければならないことが多い。以前はそれが結構苦痛で、うんうんうなりながら例えば一行書いては風呂に入り、また書いては消し、そんな連続の中何日もいて、結局やろうとする項目の羅列で終わってしまったり、文章化することを諦めたりしていた。それが、このごろは比較的短時間で書けるようになってきた。なぜか？簡単なことだけれど、自分にとってのリトミックがちゃんと座ったというか、リトミックを通して自分がどうしたいかがみえてきたということ。これまでは、リトミックを妙にかっこ良く誰かに伝えたいという気負いがあったのだと思う。

　私のところには、毎月松本の「小さいおうち」という本屋さんから、定期的に絵本や児童書が届く。またパソコンでいくつかの書籍関連から書籍を購入する関係で、‘あなたにお勧めの本があります’ のメールが届き、いつもは漫然とみるのだけれどときどき、おや？と目が止まる本の紹介がありつい注文して読んだりする。長野で本屋にはほとんど立ち寄らないけれど（品揃えが悪すぎ）、ごくたまに「ん？」とたちどまった本がおもしろかったりする。それらの本はジャンルもバラバラだし自分にとっては脈絡もなにもないのだけれど、読んでみてなぜか同じパズルのピースを見つけたような感じをうける。しかもそれはどちらかと言えば平面より立体パズルのようなイメージ。ああ、またあった、これはこいつの近くだなって感じで。特にびっくりしたのは、小泉英明：脳科学者　秋田喜代美：教育学者（幼児教育）　斎藤公子：保育士　この３人の本を別々に読み共感していた。そうしたら、脳科学者の小泉氏が秋田氏とも斎藤氏とも共著をだしていたのだ。私にとってはリトミックという共通項の中に３人の論が重なったと言う訳である。

　今年亡くなった父の新盆の法要に寺の住職が実家にきてくださり、話をした。お盆についてとか仏壇についての話だ。住職の話が自分にとって腑に落ち、これもまたピースの１片であることを確信した。「さかさま」ということ。お盆は逆さまの自分に出会う時と言うのだ。今まで納得できなかったり、うまくいかなかったり、ストレスになっている自分の見方、捉え方を自分を逆さまにして考え直したらすごく簡単なこと‥。お盆はさかさまの自分に出会う時と言うのだ。（盆＝さかさま）とはいえそうは言っても簡単にできるものではない。だからこそ１年に１回逆さまの自分を思う時があると言うことは大事だと。

　聖書に１００頭の羊のうちの１頭が迷子になったとき、羊飼いは９９頭を残して１頭を探しにいくというくだりがあり、これは賛美歌にもなっている。このことについての賛否は、自分が羊だとしたらとか、羊飼いだとしたらと置き換えていろいろ考えたりするのだけれど、このごろの私はその行為自体を考える。そうなってしまう（そうしてしまう）身体と心（実際は脳）に関わりについてである。１頭の羊を残りの羊をどうしようとか、１頭だけだから探さずにいようとか思う前にただ探しにいくという行為。
　頭でいろいろ考えている段階と実際に身体が動いて何かするとでは、大きな隔たりがある。「私もそう思っていました」とどんなに声を大にしたところで何もしなければ結局のところ「そうは思いませんでした」と同じなのである。では、思ったことを行動に移す場合と移せない場合何が違うのだろう。ここにはじめて幼児期からの体験の蓄積のあるなしが大きく影響してくるということが子どもたちの様子から納得できるようになった。
　そして、子どもたちとリトミックをしながら思うのは、子どもたちの置かれている環境は親をはじめとする大人たちがつくっているということ。大人に自覚や意識的に、という考え方がなかったら、極端な話何も考えず何もしない子どもたちをたくさん生み出してしまうと言うこと。状況は危機的であったりする。子どもたちの感性をみがきそだてるのは、大人に他ならない。私の中のパズルが３次元的にできあがるためには大人たちのチーム力が必要であることも事実。
　秋から大人のリトミックはじめます。

バス模型のススメ 趣味講座 其の二

Kazuya OSAME 1971~
納 和也

鉄道マニアは昔から市民権を得て、大々的に撮影、N ゲージ模型他多数のスタイルと共に
確立していました。
わたくしは幼少の頃からそこに違和感を持って不在の場所を求めて生きて来ました。
スーパーカーブームにも表向きには興味を示した振りをしながら実は隣の平屋建てに増築した二階部分に興味があり、またはトタン葺きの空き家がかっこよかったりといった感覚でありました。
おもちゃ屋に行っても電車、スポーツカーの模型はあるが隣の平屋建てに増築した二階屋、建築中の家、ライトバン、バスなどは皆無であった。
本当に満足できるアイテムは不在のまま時は流れました。
初めて自分に近い感覚の模型を購入したのは小学生の頃です。
N ゲージのアクセサリー的扱いの商店の模型と荒削りのバスの模型でありました。
それだけではどうにも飽き足らずペーパークラフトで地元川中島自動車の車両を精密に、作ったりしておりました。
要するに誰も興味を示さないものに惹かれる性分だったのでしょう。
だからおやじの古いカメラをもらって街を撮影しておりました。

僕は気が付くと路線バスに偏執狂的に興味を持つ人間になってました。

解る人には解るともいますが長野に住んでいる事は路線バス好きにとって桃源郷のようなものなのです。
解らない人には解るまい。
松本市の松電は貴重な「北村製作所製車体」と「いすゞの BU の高出力シャーシ 10K」の組
み合わせ、伊那自動車は「長尺北村製作所製車体」と「いすゞの BXD の高出力シャーシ」
の組み合わせ。そして千曲自動車には日産ディーゼルの 4R、最後に長野市では全て「川崎重工製車体」にいすゞ、日野、三菱を乗せるという偏執的な車両が他県に比べてもとても多いのです。幼少の頃東京に行った時などは逆に一般的な路線バスに驚いたものです。
この趣向は電柱、ガードレール、道路、木、ブロック塀、など本当にどうでもよいものにカテゴライズされるでしょうね。
駅前で路線バスを撮影していると「何を撮ってるんですか？」とよく声を掛けられます。駅のホームでカメラを構えている人なら「ああ。。。」とそっとしておいてくれる形の物です。
あと女子高生、ギャルからは警戒され、挙句の果てには運転手から「何がよくてこんな物撮影してるんだ？」と笑われる事もありました。

そういう形で時は流れ模型の方に目をやると、2000 年あたりから観光バスの模型が出始め、サイズは HO サイズと大き目、売れないだろうからコスト削減のためにポリストーン製でデカール仕上げといったものでした。値段も 5000 円と結構なものでしたが画期的でした。その後、京商からラジコン路線バスが発売されました。
HO ゲージのジオラマの上を操縦するという面白いがまだ N ゲージ鉄道模型に比べると趣向
が異なる域でした。
2003 年に TOMIX という N ゲージの大手メーカーがトミーテックという子会社を作りそこで、ついにバスの N ゲージ模型が発売されたのです。
体裁も鉄道と同様にケースもあり本体も精密極まりないものでした。
それと同時に街並みシリーズも発売され、誰も興味を示さない物の模型が続発されまして鉄道が不在でも成り立つジオラマが可能な状態となりました。
路線バスは鉄道同様道が線となります。
鉄道は線路がありますがバスは道路が線に該当します。
既存の N ゲージのジオラマはあくまでも主体がありそれを惹きたてる為に風景を作ります
。しかしトミーテックの姿勢は風景そのもの、非主体でも成り立つジオラマを可能にしました。
実際にわたくしは幸いにバスの N ゲージ愛好者となり色々試行錯誤しておりますが、バス
が主体となるジオラマはとても難しいものです。
バスは何台も走りある 1 台が主体となっては面白くないのです。（これはやってみないと解らない事でしょう）
営業所のジオラマも難題ものバスが自然に置かれているか、建物との関係など鉄道以上にシビアなのです。極論を言えばバスが無くてもバスがここを走っているのが感じられるジオラマでも可能なのです。
要するにこの地上にあるすべてのものが必要でその関係性を楽しむのです。
（次号へ続く）

ナイト・ミュージアム

Miho NAKAO
中尾美穂

夜の美術館は案外うるさい。
作業中に展示室で休憩をとろうとしたことがある。それまで響いていた金槌の音のかわりに、機械の振動音や植樹が窓ガラスを擦るこれまた耳障りな音が飛び込んでくる。庭は暗闇。虫の音もするだろう。「展示室を独り占め」なんて聞こえはいいが、余裕のない時にはこれから並べる作品の気配を感じて落ち着かない。
それが厄介だ。破調を嫌い、なのに各々個性を出したがり、この並びじゃ映えないだの、照明の当たりが違うだの、もっと空間が必要だのとざわめく。残り少ない時間を気にしながら泣く泣く要求に従うと、場の流れが変わる。見慣れた作品に思わず見入ってしまう。
結局休めない。

暗い室内で行なう作品撮影もにぎやかだ。
レンズを覗きこむカメラマンがしきりに首をかしげる。原画にないサイケデリックな蛍光色を拾ってしまうらしい。「何だ」「何だ」と皆色めく。別の作品にはなぜか靄がかかる。画中に別の絵？　X 線じゃないのに。もともとミステリアスな作品だからか微妙な色調のせいと割り切れず、謎めいてみえる。
プロの腕にはとても及ばないが、館員も撮影する。最近、髑髏が描かれた水彩画を撮った。タイトルは《部屋の中の死》。所蔵者はミステリー作家。何カット目かで同僚が声を上げる。画を横切る目のない不気味な顔。照明と絵具の滲みの悪戯に違いない。それでもドキリとする。

勤めている美術館は個性的である。凹凸が多く、通路や階段は狭く、湾曲した壁がある。館員泣かせだ。だが建築には愛着がある。
隔年開催した陶展で、建物に囲まれた中庭を会場にした。搬入後に館内をライトアップして夕暮れの庭から見る。ラウンジの設置作品が幻想的だ。「やっぱり池田さんっていいよねえ」と関係者がしみじみと言う。
一日の終りに見るのもこんな景色だ。この時ばかりは空間を独り占めする贅沢を味わっている。

池田満寿夫美術館
〒381-1231 長野市松代町殿町城跡 10　tel.026-278-1722
fax.026-285-0344
http://www.ikedamasuo-museum.jp/
* 山上晃葉《fission》をエントランスで展示中（期間未定）。
10/6（土）に関連イベントを行なう予定です。詳しくはお問い合わせください。

死骸

Nami GOTO 1969~
ごとうなみ

暑い夏の日
ベランダに布団を干そうとしたら
手すりに蛙が死んでいた
手足がだらんとのび
目をこちらへ見開いたまま
ひからびていた

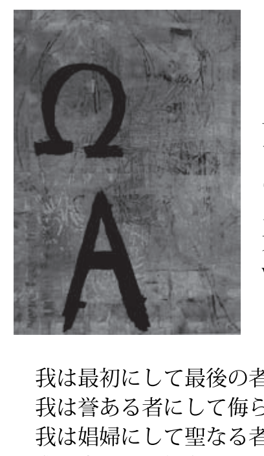
死骸は嫌い
怖いから

布団を干すのをやめて
死骸も見なかった事にして
他の用事を過ごしていたら
突然に激しめのスコール

ひとしきり降った後
ベランダへほんの少しの期待をもって見に行くと
さっきの蛙は生き返ってはいなかったけど
雨に打たれて
どこかへ流されたみたい
消えていた

アートと思考① ～越ちひろ、処女にして母

Yousuke HATTORI 1974~
服部洋介



　「昔は恋愛が怖かった。愛するものができると絵がやわらかくなりすぎる気がして。（…）今は全てを受け入れていこうと思うし、子どもを産んだあとの自分の絵を見てみたい」――ある対談で越ちひろ（千曲市出身）は語っている (*1)。かつて彼女は、グノーシス文献『雷、全きヌース』（「ナグ・ハマディ文書」コーデックスⅥ所収）の以下の部分を web サイトに引用している。

> 我は最初にして最後の者なるゆえ。
> 我は誉ある者にして侮られし者。
> 我は娼婦にして聖なる者。
> 我は妻にして処女…
> 我は石女にして多くの息子あり…
> 我は把握されざる沈黙…
> 我は我が名の言辞。(*2)

　娼婦にして聖女、妻にして処女、不毛にして多産――自己に対するこの両価的な認識は、作家のステートメントにもあらわれる。

> 私は、意識の及ばない時間に身体のみを委ねる。
> その線や点は、私の奥から放たれる。
> 無意識の状態に近づけば近づくほど、表面に存在する物質は、内を叩き付ける。
> 魂が肉体と融合する。
> その中で私が描き続けていること。
> 両面を持って存在すること。
> 女性的であり、男性的。強くて、弱い。暴力的で、狂気に満ちていて、優しく、儚く確かな存在。
> 華やかでダークで、生であり死であること。(*3)

　「女性的であり／男性的」とは何であろう？　以下、「強くて／弱い」「暴力的で／優しく」「儚く／確か」等についても、雑駁にいえば同じ問いといえるだろう。「男である」を「女ではない」と言い換えるならば、命題「越ちひろは女である」が成り立つ時、「越ちひろは女ではない」が同時に成り立つことはない。これら、対になる組み合わせ（シジギー syzygy）の一方を A（女である）とすれば、もう一方（女ではない）は、¬A（A ではない）となろう。このような一項真理関数をベン図であらわすと、円によって限定された内部が A、その外部が¬A となる。A と¬A は共有部分（「A であり、かつ A ではない」A∧¬A）をもたない。「A であると同時に A でないものは 1 つもない」、つまり「無」（nullus，DB における NULL）である。「無」とは「矛盾」であり、世界にあって「表現することのできない」領域をあらわしている。矛盾が真とされる時、あらゆる命題はそのままに成り立つ（爆発原理）。これは古典理論において

$$A, \neg A \vdash B$$

　と定式化されているが、要は「A かつ A ではない、が成り立つとき、B はすべて成り立つ」ということであって、一つの矛盾を真と認めるならば、そこからあらゆるものが真へと導かれることが知られている。ゆえに矛盾は恒偽命題とされなくてはならない。
　だが、ある種の伝統においては、神はむしろそのような矛盾として捉えられていた。「神は全知全能」という定式も同様の矛盾を孕んでいる。神の不可知の本質を、第一ヴァチカン公会議は「闇に蔽われているよう」（quasi quadam caligine obvoluta）と表現し、ヴィトゲンシュタイン（1889-1951 以下、L.V.）は「論考」において「神は世界の中には顕われない」（「論考」6.432）といい、論理空間を規定して「矛盾命題はすべての命題の外側に消滅し、（…）、矛盾命題はあらゆる命題の外側の限界」（5.143）であるといって、矛盾から導かれる命題が論理においては常に偽であることを示した。その一方で「いい表わせぬものが存在するのは確かである。（…）それは神秘である」（6.522）といい、「時間・空間のうちに生きる生の謎の解決は、時間・空間のかなたに求められるのだ」（6.4312）とも言っている。もっとも、彼にとっての神秘は「世界の全体」すなわち A∨¬A そのもの（トートロジーとしての排中律。「A または A ではない」）であって、必ずしも神を矛盾と捉えていたとはいえないようである。「越ちひろは女または女ではない」は恒真命題である。L.V. は世界の半分、すなわち「越ちひろは女ではない」の部分を「マイナスの事実」と呼んだ。それは真なる命題の記述に登場しながらも、経験的には偽であり、不成立の事実である。その全体は真でありながらも、何も語らない。越ちひろは女なのか男なのか。しかし、間違いなく越ちひろはそのどちらかなのである。この問題は様相論理学に持ち越された。現実世界が成り立っている以上、可能世界が成り立たないという論理的必然性は認められない。様相実在論では「越は女ではない」というもう一方の世界の実在を想定する。だが、それはそもそも越が女であるという「プラスの事実」を欠いては予感されえない可能性であろう。
　一方、「無なる神」という矛盾を人間理性は拒まざるを得ない。それは、現実の生においては成り立ちえない像である。われわれの目には、どう見てもベン図内の A と¬A は円の内外に分割されており、円内の有界領域（A）は円外の非有界領域（¬A）とは隔てられている。平面において閉じた曲線が領域を内と外に分割するというジョルダン閉曲線定理は、われわれの生の体験とも矛盾しない。個である「私」と「私以外のもの」の混同が起こることはない。しかし、「私」の唯一性は自明のものではない。それを知るには「私以外の世界」に「私」が存在しないことを証明しなくてはならない。つまり、世界にどのような対象がどれだけ存在しているのか、原理的に全て知っていなければならないからである（全称命題は基本的に同様の問題を抱えている）。A∨¬A は何も語らない。それは説明するまでもなく真でありながら、同時に語りえない全体である。それが分割されるにつれて、私たちはある種の不完全さについて言及せざるを得なくなる。「私」について言及することで、私たちはうっかりと世界の全体をも規定しているのである。それを回避するために、哲学は言語 = 世界を明晰に限定しなくてはならない。
　ところで、上の閉曲線定理は、立体上では必ずしも成り立たない。先だって亡くなられた梅垣寿春博士に学び、Mizar によるジョルダン閉曲線定理の完全証明の定式化に貢献した信州大学工学部名誉教授の中村八束博士（長野市出身）は、3 次元においてジョルダンの定理が破れる様子を「穴を掘って脱獄すること」に喩えている。円内に穴があったとすれば、表面をジョルダン曲線で閉じたとしても、内と外がトーラス状に連続しているため、曲線の内部（A）と外部（¬A）は分割され得ない。マイケル・スコフィールドは、フォックス・リバー刑務所のこの性質を利用して、『プリズン・ブレイク』に成功した（他の場所では無理だった、笑）
　ここで画家の言葉に戻ろう。モリヤコウジとの対談で、画家は次のように述べている。

> 「ウロボロス」という自分の尻尾を食べて生きている神話の蛇がいます。はじまりと終わりがない、生死の両方を持つこの蛇は、永遠のマークの象徴になっているとも言われていて、それがこの世のすべてであると言われています。(*4)

　彼女の web サイト『ouroboros』（ウロボロス）には、ユング (1875-1961) の高弟エーリッヒ・ノイマン (1905-60) の言葉が引かれている。

> 自身を殺害し、結婚し、受胎させる者。
> 男にして女、孕ませる者にして孕む者。
> 飲み込む者にして誕生させる者。
> 能動であり、受動。上なるものであり、下なるもの。

　これは『ユング心理学事典』(*5) の邦訳 p.20「ウロボロス」の項の要約である。余談だが、東京大学総合研究博物館ニュースも『ウロボロス』という。その赤門前の大山堂書店に、かつてノイマンの『意識の起源史』(*6) が陳列されていた。その下巻 p.436 に「「ウロボロス状態」とは間違いなく [意識が] ゼロになる状態である」という示唆的なフレーズがある。越の言葉「私は、意識の及ばない時間に身体のみを委ねる」を思い起こしてほしい。ここに彼女の創造性の心理学的ないしパトグラフィ（病跡学）的な原点がある。
　一方で、ウロボロスはグノーシス的なキリストのシンボルでもある（パリ国立図書館の錬金術史料「写本 2327」等を見よ）。ノイマンの前掲書〈上〉には「ウロボロスは、《全は一なり》の元型としていたるところに見られ、（…）「私はアルパ（筆者註・アルファ）でありオメガである」と自らを明かした原存在としても現れている」（p.42-43）とある。『ヨハネの黙示録』「神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである」」（1:8, 新共同訳）を踏まえているのは言うまでもない。「始まり」（A）はすなわち「終わり」（Ω）であるという言明は、素朴に言えば矛盾を含んでいる。ノイマンは、ウロボロスというシンボルの最大の特徴が「規定されず、規定しえないもの」、すなわち無限定性にあると指摘する。彼はそれをユダヤ教神秘主義におけるエイン・ソフ（絶対無）に喩えた。全てが可能な爆発的な領域（矛盾的な無）から、L.V. のいう神秘としての世界の全体へ、そして、三値論理的な未知や可能性の領域を捨象し、真偽が一方に確定した現実へと、世界は次第に分化し、意識において明晰となるのである。
　ここにドーナツがある。ドーナツとは円柱を曲げて上面と底面をつなげたウロボロス的立体だが、ドーナツの表面に立って、これを輪切りにするようにして円（meridian）を描くと、円によって閉じられたはずの内が、外とつながったままであることがわかる。ウロボロス = ドーナツ立体（solid torus）の表面においては、時に A と¬A は一体のものとしての表現をとりうる（直観主義的に拡張されたハッセ図を連想させる）。だが、平面に喩えられる私たちの生の存在形式においては、たとえ宇宙がそのようなメタな構造を有していたとしても、そのような宇宙のふくらみをとらえることも、事物を上のように分割することもできないだろう。少なくとも、こうした世界を描くには、キャンバスをもう一次元、追加しなくてはならない。「無」は存在（有）における内的な表現形式を超えている。人は世界の不在を思考することはできない。世界の中に「無」を見出すことはできない。観測のあるところ、否応なく世界は存在する。その中にあって、まさしく思考できないもの――A であり、同時に A でないもの、A にしてΩ――それがあらゆる人間的な形象を放棄した否定神学の神であり、量子力学における観測問題であり、精神分析学派の考えるところの無意識というアナロジーであった。記述に即応する対象が論理的に存在しない――それを意味の通る文章として示すことはできても、本当の意味でそれを現前に表現することもできない。という意味では、あらゆる芸術「表現」は、A∧¬A というよりは、A∨¬A のうちに含まれる。A が成り立つということは、それだけで「A が成り立たない」可能性をも自動的に現出させる。そこまで含めて恒真命題は成立する。それは常に真なる形式である。たとえ A が真であっても、偽なる¬A を加えてかまわないということになる。「かぎられた全体としての世界にいだく感情、これこそ神秘的なものだ」（6.45）は、アートが成り立つ余地を指すかのようである。越ちひろは男または女であり、処女または母なのだ (*7)。相反するものが全体として示された時、それは常に真なのである。「世界がいかにあるかが神秘なのではない。世界があるという、その事実が神秘なのである」（6.44）。彼女にはなぜペニスが「ある、または、ない」のか、男を「知らず、または、知っているのか」――それが神秘なのだ。
　「自身の行為を言葉で組み立てるには少し早い気がした。言葉は痕跡の上に自然と現れる」（越）と (*8)、「いい表わせぬものが存在するのは確かである。それは自ずと現われ出る。それは神秘である」（6.522）とした「論考」はどう対比さるべきか。ただ一ついえるのは、彼女が「処女∨母」から、限定された「母」への道を着実に歩み始めた、ということだ。それは彼女が近い将来に予期する「自身の行為」を「言葉で組み立てる」ことに他ならない。
　「およそ語られうることは明晰に語られうる。そして、論じえないことについては、人は沈黙せねばならない」――「論考」序文の名高く清澄な一節は、私にとっての慰めである。それを今、人をまことに愛することを受け入れた、画家に捧げる。

文中敬称略。なお、本文中『論理哲学論考』の引用は法政大学出版局「叢書・ウニベルシタス」版（藤本隆志、坂井秀寿訳，1968）に拠った。ただし、序文は野矢茂樹訳「岩波文庫」版（2003）に拠る。

(*1)『チャンネル』vol.7，合同会社 ch.，2012
(*2)『 ナグ・ハマディ写本　初期キリスト教の正統と異端』Elaine Pagels / 荒井献，湯本和子訳，白水社，1982
ただし、越の引用したものは Malcom Godwin『天使の世界』（大瀧啓裕訳，1993）p.216「死海写本にあるソフィア自身の言葉」とされる一節。
(*3) 越ちひろ web サイト『ouroboros』
(*4)「私はこんなふうに描いてきた」（アートブック『Birthday』, 2012）
(*5)『ユング心理学辞典』A.Samuels, Fred Plaut, Bani Shorter / 濱野清志、垂谷茂弘訳，創元社，1993
(*6)『意識の起源史』(上)(下)Erich Neumann / 林道義訳，紀伊国屋書店，1984-85
(*7) 実際には排他的論理和（処女∧¬母）∨（¬処女∧母）であり、両立的選言ではない。この場合の「処女」とは限定的に「処女は生物学的母たりえない」ゆえに「母ではない」の置き換えと了解されたい。
(*8) 山ノ内町立志賀高原ロマン美術館『ナガノ新コンセプトゥス』パンフレット，2012
なお、同展において「言語 = 世界」の構造を自覚的に扱っている作家として、松田朕佳（信濃町在住）を挙げておく。

「あいにいく」を始めてみて。

Shizuko OGAWA 1973~
小川志津子

日本全国のどこかにいる、何かを創りだして光を放っている人に、会いに行って丁寧に書く、という完全自腹型個人プロジェクトを立ち上げました。やればやるほど、「現在」は閉ざされているなあと思います。こんなに情報社会なのに、こんなに素敵な人たちが、この場所でこんなに光っているのに、誰もそれを知らない。もったいねー！と思うのです。初回は島根の高校教師、２回目はクラシック音楽の指揮者に取材しました。３回めは、誰にしようかなあ。あなたかもしれません。いや冗談でなく。ぜひ、ちょくちょく観に来てください。
http://www.ai-ni-iku.com

分枝 branching
http://branching.jp
branching 02
publish : 9,September.2012